ぴょんぴょん

エンジン

ぴょんぴょん

作：エンジン

久しぶりの帰宅だ。ああ、本当に疲れた。会社での寝袋生活からのしばしの解放、清々しい。仕事はまだまだ終わらないが、それでもほんの少し休めるだけ、有り難いってもんだ。

深夜の冷たい空気を思いっきり腹に吸い込むと、身体が軽くなったような気がした。家に帰ってから５時間、ふかふかの布団でゆっくり眠れるんだ。冷蔵庫の中にある飲み物を思い出しながら帰路に就いていると、何やら変なやつがいるのに気づいた。

所々の髪が毟ったように禿げている、痩せたおっさん。季節はずれのＹシャツに縞模様のトランクスを履いたそいつがピンと真っ直ぐ立って、その姿勢のまま小刻みにジャンプしてる。もう少し近づいてみると「ぴょん、ぴょん」って、小さな声でつぶやいてやがる。

　ちっ気分悪りぃ。こちとら上機嫌でお帰りの所によ、真夜中こんなのがいたら気味が悪くって仕方がねえだろうが。大体こういうノータリンは、親が責任持って管理しとくもんじゃねえのか？座敷牢にでもぶち込んどけってんだ、ったくよ。

　知恵遅れのせいで少々泥はついてしまったが、なあに大したことはない。俺は一週間ぶりマンション一二階の我が家へ帰り、ちゃんとお湯の出るシャワーとカキカキに冷えたビールで己を労った後、暖かい寝床へ飛び込んだ。すぐにまどろみがやってきた。先ほど出会った不快な人物のことなどは、仕事でのトラブルと一緒に綺麗さっぱりサラサラと溶けてなくなってしまうぐらいの、穏やかな眠りに入った。

――ぴょん、ぴょん

　近くで声が聞こえたので、俺は薄目を開いた。まだ日は差し込んでない、ざっと午前二時ぐらいってところか。

　ぴょん、ぴょん、ぴょん

　真っ暗な部屋の隅で、何かが跳ねている。ぼんやりとしか見えなかったが、それでもすぐに分かった。

　帰り道にいた、頭のおかしいぴょんぴょんオヤジだ。酒のせいか不思議と恐怖は感じなかったが、それでも驚きはした。試しに目をこすってみたが、ヤツは消えない。ぽかんと開いた口から舌を出して、楽しいのか苦しいのか読み取りにくい表情をでおかまいなしにジャンプし続けている。

　そういった事態が目の前で起きているのに、俺は立ち上がることができなかった。身体が異常にダルい、日々の疲れが原因だ。疲労のせいで異常なまでにリアルな幻覚を見るってのを聞いたことがある。だから目を閉じて、再び眠りについた。もう一度遭ったらぶん殴ってやる、と頭の中で毒突きながら……。

――雀の鳴き声で意識が戻った。

　目を閉じたまま、室内の雑音に注意するが、声は聞こえない。思い切って目を開くと、いつもの部屋の風景だった。やっぱり疲れが原因で変なものを見たんだな。

　駅までの道を歩くが、例のおっさんは見当たらない。

　そういえば、この仕事についてから朝晩何十回とこの道を通っているが、あんな奴は昨日初めて見たぞ。俺が会社に詰めている間に、引っ越してきたのか？まあいいや、ああいうのは出来るだけ遭わない方がいいんだ。やっぱりぶん殴ったら、後々問題になりそうだもんな。

　会社に着いて、自分の部署の扉を開けた時、あんまり驚いてカバンをその場に落としてしまった。俺のデスクの側で、あの男が全く同じようにゆっくり飛び跳ねていたのだ。

「ぴょん、ぴょん、ぴょん」

「何してんだよおめえ！」

　俺はおっさんのよれよれなＹシャツを掴んで、思いっきり怒鳴った。それに驚いた同僚達が、一斉に俺の方を見る。

「ぴょん、ぴょん」

　おっさんは何食わぬ顔で、どっか余所の方を見ながら呟き続けている。

「何してるんだって聞いてんだよガイジ！」

「おい、何叫んでんだ！？」

　上司が恐る恐る近づいてきた。

「見りゃ分かるでしょうよ！　こいつですよこいつ！　誰だよこんなの通したのは！」

「こいつって、誰だ……？」

「だからこの知恵遅れのオヤジだってーー」

　上司は俺の指さす場所を見たが、すぐにこちらに向き直った。瞬きもせず、まるで俺が異常なことをしてるような目で睨んでくる。

「なあ、落ち着いてよぉく見てくれ。ほら、深呼吸して」

「いや、何言ってるんですか！？　まさかこいつが見えないって言うんですか？」

　そこに後輩の一人がやってきた。俺が一から仕事を教えてやった、いわば弟子のような男だ。

「おい！　お前なら見えるよな！　俺が掴んでるやつ、いるよな！」

　だがそれには答えず、後輩は上司に何かを耳打ちした。すると二人は共にあからさまな作り笑いを浮かべ、腫れ物に触るような調子で答えた。

「あ、ああ、見えるよ！　見えるとも！　わ、私にも皆にもちゃんと分かってるさ……！」

「せ、せ、先輩！　その女、いや、お、男！？　ともかくその人は僕らが何とかしますんで、ちょっと椅子に座ってお、落ち着きましょうよ！」

　どうみても、嘘ついてやがる。後ろで、女子社員が何やら電話を掛けている。おそらく病院だろう。こいつら……俺をイカれ扱いするのか？

「ぴょん、ぴょん、ぴょん」

　おっさんはこの状況をあざ笑っているように見えた。カッとなって、その右頬を思いっきり殴ってしまった。周囲の何人かが叫んだ。

　奴は後ろにあったデスクに後頭部を強く打ち付けたが、すぐさま起き上がり、再びジャンプしはじめた。強くぶつかったはずなのに、傷一つない。

「先輩！　疲れてるんです！　だから休みましょうよぉ！」

　周りの人間は、一人残らず俺を注視している。俺が取る次の凶行に巻き込まれないように、いつでも逃げ出せるように……。

「君の目の前には、誰もいないんだよ！」

　堪えかねたように、上司が叫んだ。

　何でだ？　何でみんな、こいつが見えない？　男の姿も、声も、飛び跳ねる度に発せられる地面を踏む音も。全部そこにあって、しっかり聞こえているのに、何故、分からないフリをする？

　たまらなくなって、その場から逃げた。あれほど一緒に仕事をしてきた仲間達が、ひいっと叫んで俺を避けていく。

　電車に飛び乗った時、運転席にあいつがいて相変わらず跳ねていたが、もはや構う余裕がなかった。

以来俺は、人との接触を持たなくなった。どこへ行ってもあのおっさんが何の前触れもなく現れ、何事もなく跳びはね続ける。「ぴょん、ぴょん」と呟きながら。

最初の内は怒りに任せ、会社の時と同じように掴みかかったり殴ったりした。ひどい時には、側に落ちていた金属バットで眉間めがけて思いっきり打ち飛ばしてやったりもした。だが、起き上がりこぼしみたいにすぐ起き上がって、同じことを繰り返す。そして俺一人が頭のおかしい人間と見なされ、警察から必死で逃げたこともあった。

そういうことが何ヶ月も続き、俺はまともな生活ができなくなった。死なない程度の食事を摂取し、時折出現するおっさんの呟きを耳にしながらただ時間が過ぎるのを待つ、そんな毎日。最悪の生活環境の中、身体はどんどん痩せ細り、髪は追々抜け落ちていく。

　そして今日も、おっさんはジャンプし続けている。

「ぴょん、ぴょん、ぴょん」

　いつの間にか、こいつに対する嫌悪感が失せていた。不思議な親近感すら持っている。

「よう、いつも元気だね」

　はじめて声を掛けた。とは言っても、やつは反応すらしない。いつものようにぴょんぴょん口ずさんでいるだけだ。

　たまには、顔でも洗うか。そう思って洗面所に立った時……。

　もう一人、おっさんがいた。所々髪が抜けた頭、すっかりやせ衰えた身体。よれよれのＹシャツに、縞模様のトランクス。

　試しにぴょんと跳んでみると、そいつも同じように跳ねた。理屈は全く説明できないが、それでも全て分かったような気がした。

ぴょん、ぴょん、ぴょん。呟きながら、準備にとりかかった。なあに、すぐ終わるさ。

ぴょん、ぴょん。チェーンを外し、扉の鍵を開ける。久々の外、夏の日差しが暑い。

ぴょんーー

俺は柵を越え、跳んだ。

（第１９話　完）

ぴょんぴょん

http://p.booklog.jp/book/93927

著者：エンジン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/93927

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/93927

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ